

地球の木

♥ 地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■安井清子さんお話会~本とラオスの子どもたち~1~	~2
■ラオス図書プログラム 絵本貼付活動	2
■ラオスプログラム(森と暮らし)	3
■地球の木学習会「森に学ぶ」	3
■ネパールプログラム4~	~5
■多文化共生	6
■SDGs多文化CITYフォーラムよこはま	7
■インターンの大学生が学び、考えたこと	7
■インフォメーション/活動日誌	8
■編集後記	

ラオス図書プログラム

読み聞かせを通じて、 本の魅力を伝える活動をあきらめない 安井清子さんお話会 ~本とラオスの子どもたち~

12月10日、JICA横浜にて「安井清子さんお話会~本とラオスのこどもたち~」 を開催しました。ラオスでは、子どもたちの図書環境がまだ整っていません。安井 さんは現地で図書館活動に関わり続けることの大切さと大変さを常に感じなが ら、30年以上活動を続けてきました。昨今のスマホ、テレビがある時代に、図書館 や絵本を通して何ができるのかを考えながら新たな挑戦にも取り組んでいます。



安井清子さん 図書館活動家・絵本作家・モン族民話 研究家・ラオス山の子ども文庫基金代表

第2次インドシナ戦争(1960~1975 年)後、ラオスに住むモン族の中には国外 に移住しなければ命に危険があり、難民 となった人々がいました。隣国タイのバ ンビナイ難民キャンプには、ラオスから モン族が多く収容されていました。

安井さんは、1985年から5年半、その 難民キャンプにNGO(シャンティ国際ボ ランティア会、以下SVA)のスタッフとし て派遣され、図書活動をスタートさせま した。そこで出会ったモン族の子どもた ち。彼らの母語、モン語には文字がありま せん。活動開始当初は、モン語の「なに? (ダッチ)」を覚え、子どもたちから言葉を 教えてもらいました。子どもたちへの絵 本の読み聞かせでは、覚えたての言葉と

絵の力を使って、ページを開くと広がる世界をどのように伝 えようかと、夜な夜な悩み、準備しました。

モン族に口伝の豊かな民話の世界があることを子どもた ちから聞き、キャンプに泊まり込んで、語り継がれる民話の 録音を始めました。難民キャンプでは、モン族が得意な刺繍 でラオスでの体験や村の暮らしを伝えるタペストリーが作 られていました。刺繍で絵本を作ってみようと、刺繍絵本づ



刺繍絵本は文字も刺繍されています

くりが始まりました。子どもたち自身が構 図を考え、布に下絵を書き、刺繍します。た くさん集まったモンの民話など、子どもた ちが作った刺繍絵本は100冊以上。今回 のお話会では特別に、当時作られた刺繍 絵本の中の6冊を会場で回覧させてもら うことができました。ずっしりと重い刺繍 の布絵本は、一針一針丁寧に縫製され、手 が震えるほど素晴らしい作品でした。

難民キャンプの閉鎖と難民の帰還に伴 う、ラオス国内でのSVAの図書活動に関わ った後、安井さんはフリーランスとして、 ラオス国内で3箇所の図書館を運営して います。その図書館の一つがあるシヴィラ イ村は、難民キャンプに住んでいた人たち が移住した村で、安井さんとの関わりが

続いています。村の人たちと一緒に長い年月をかけて作った 中等学校の一角にある図書館では、難民キャンプで絵本の楽 しさを知った子どもが今でも図書館のスタッフとして働い ています。子どもたちが本(お話)に親しみ、ラオス語で学べ るようになるには、図書と子どもの間に立つ人を育てる必要 があります。そのような大人が、図書館で育った世代から出 てくることを願って、安井さんは図書活動を続けています。

ラオス図書プログラム

昨今、ラオスでも一気に広まったスマホの影響などによ り、子どもたちの図書館離れを感じた安井さんは、2023年 9月から、ヴィエンチャンの私立小学校で、難民キャンプ時 代に行っていたような読み聞かせキャラバンを始めました。 学校で読み聞かせをするには先生の理解も必要で、先生にも 聞いてもらうという目的もあります。若い図書館スタッフと 共に行うこの活動は、回を重ねるごとに子どもたちが待って いてくれるようになりました。現在は高速鉄道や高速道路な どの開発が入り、生活環境は急速に変化していますが、ラオ スの人々は森や川と一緒に暮らしてきた人々です。今後はこ れまで聞き取りをしてきた民話や自然とともに生きてきた



ラオスの人々の暮らしを伝える本の出版をさらに進め、多く の子どもたちに残したいとのことでした。

安井さんの、絵本と子どもたちに関わる姿勢は30年間一貫しており、実際に体を動かして子どもたちと共に時間を過ごすこと が主眼となっています。当時の子どもたちが、今でも安井さんと共に図書活動をしたり、アメリカに移住した方が図書館を訪ねた りと繋がりが継続していることは、絵本を通じて安井さんと心の通う関係だったことの証明のように感じました。

出張ラオス語翻訳貼付活動@「フリースクールここだね」

11月15日に、逗子にある「フリースクールここだね」で、ラオ ス語翻訳貼付活動を行いました。ここでは子どもたちのやり たい気持ちに寄り添いながら、学校でも家庭でもない居場所 を様々な活動を通じて創ってきました。今回の貼付活動も、子 どもたちが「絵本に関わり、海外の子どもたちの役に立つこと に取り組みたい!」と興味を持ってくれたことから、実現に至 りました。

参加者は、子ども11名(小学校1年生から中学2年生)、大人 2名。地球の木の翻訳貼付ボランティア2名にサポートしてい ただきました。内容は「クイズでラオスを知ろう」、「ラオス図書 プログラムの話」、「ラオス語で自分の名前を書こう」、「翻訳を 貼付しよう」。見知らぬ国を想像し、日本とは異なるラオスの教 育環境を考える時間となりました。子ども達は、本を手に取っ てくれるラオスの同年代の友達へ思いを馳せ、絵本の最終ペ



サポートしていただいたボランティアからもご挨拶

ージにラオス語で書いた自分の名前とメッセージも書き添えていました。

「フリースクールここだね」のホームページにはこのように書かれています。「今の社会でこころ豊かに『わたしらしく』生きてい <ために必要な『学びの栄養分』を増やしながら、子どもたちの『心のタネ』を大事に育む土壌でありたいと願っています」。この活 動時間が、子どもたちの栄養分になれていたらと願います。「ここだね」のブログにもラオス図書プログラムの活動に参加して感 じたことが書かれている記事があります。ぜひご一読ください。(https://kokodane.org/想像力と行動力~ラオス絵本プログラム/)

ラオスに17冊の絵本を届けていただきました!



山本さん(左)とバンロップさん

ラオスに出張される方が、安井さんのお話会に参加してくださったことがきっかけで、 ラオス語貼付済み絵本の運搬ボランティアを引き受けてくださいました。1月17日に17 冊の絵本がヴィエンチャンにあるNPO法人ラオスのこどもの図書館スタッフ、バンロップ さんに手渡されました。多くの方にご協力いただいて、この活動が継続されていることに 改めて感謝いたします。ラオスへの船便の再開時期は未定で、貼付済みの絵本の多くがま だ地球の木事務所に残っています。全ての絵本がラオスの子どもたちに渡るまで、運搬活 動も継続して行ってまいります。

(ラオス図書チーム 相馬淳子)

セコン県の支援地で進む地道な活動

昨年12月に中間評価とモニタリングを兼ねて現地を訪れた JVCラオス事業担当の後藤美紀さんから話を聞くことができました

私たちが支援している日本国際ボランティアセンター(JVC) ラオスのセコン県での活動は、正式に始まってから1年半が経 ちました。JVCの役割は、村人が自分たちの村を知り共有資源 の価値を確認し合い、コミュニティ林や魚保護区を作ってみん なで守っていく、そのサポートをすること。「実際にやっている ことは村人との話し合いがほとんどですね」現地駐在員の山室 良平さんは、昨年の夏の報告会で、そう言っていました。そんな 地道な活動がその後はどう進んでいるのでしょうか。

法律研修に映像を取り入れる

村人のための法律研修には、JVCが関係行政機関や他の NGOと共に毎年作る法律カレンダーを活用しているが、この 頃はそれと共に、村で起こりそうな事例をドラマ仕立ての映 像にして村人に見せているとのこと。さらにカレンダーにつ けたQRコードから、村人がいつでもその映像を見られるよう にもなったという。手応えありとのこと。

ていねいな聞き取り

コミュニティ林や魚保護区の設置をする際には、村人と一 緒に話し合いを重ね、村ごとに共通ルールを決めるわけだが、 そのことによって、今まで採っていたキノコが採れない、魚が 穫れないなど、規則に縛られ生活が圧迫されている世帯がな



村人への聞き取りをする後藤さんと山室さん

いか。貧困家庭をさらに困らせていないか。スタッフが訪問し て話を聞いた。JVCの活動によって悪い影響(ネガティブイン パクト)が出ていないかに重点を置いて行った今回の聞き取 りだが、そういうことはないことが分かった。

キャッサバの連作障害に対処策

換金作物としてセコン県に広がるキャッサバ栽培。しかし2 年目から土地がやせて収量が減ることが問題になっている。そ の対策として、土中の窒素を安定させ地質をよくするという落 花生などのマメ科を混作することで土壌を改良していこうと いう活動を始めた。成果の分析はこれからだが、村人は積極的 だという。 (ラオスチーム 斎藤 和子)

.

地球の木学習会「森に学ぶ」~2/23 横浜市緑区 新治里山公園~

森の入り口でお話を聞く

降り止まない雨、おまけに最高気温5℃となった当日。残念 ながら、予定していた参加者は半分の11名になってしまいま した。楽しみだった森歩きは奥までは行けずに入口を少し入 ったところまでとなりました。それでも、里山の畑や森の木々 をゆっくり見、木の良い香りを含んだ空気を目一杯吸い込ん で気分がリフレッシュされました。講師の吉武美保子さんは 新治里山公園の指定管理者であるNPO法人新治里山「わ」を広 げる会の事務局長であり、長年里山や森に関する研究をされ ている方。「森の成り立ち」について、まず土がどうやってでき るのか、そこにどんな木がどんな経過を辿って生えていくの かなど分かりやすく説明して下さり、参加者は皆うなずくこ とばかりでした。



講師の吉武さんのお話に興味津々

たたみの部屋でレクチャー

簡単なフィールドワークの後は、立派な木組みの旧奥津邸 でのレクチャー。「里山」は、薪がエネルギー源だった時代から 化石燃料に変わったことが主な原因となり衰退していったと いうこと、また、現在の新治市民の森の保全活動やボランティ アの力について、横浜市の緑地保全行政のことなど、多岐にわ たる内容で、とても学びの多いお話でした。ボランティア組織 で森や田の保全活動をしていくことの大変さや、人口の多い 住宅地に隣接した森ならではのモラルの問題など悩ましい課 題もあるのだと知りました。

ラオスの支援活動を伝える

地球の木からは、用意していった写真を交えながらラオス 農村部で続けている支援活動について話をしました。開発で 村人の森が奪われていくラオスの現実。そして日本では、手入 れできずに放置された森の木の高齢化が進み、このままでは 危険という状況が全体的にあるということ。古来、森(自然)に 守られて暮らしてきた人間が、経済活動により自然を破壊し ながら、あるいは放置しながら「豊かな」暮らしを享受してい る今。森と人との関係というものを改めて考えなければいけ ないと思いました。 (ラオスチーム 武安 ますみ)



「SDG4:質の高い教育」をめざして~ネパールモニタリング調査から~

2024年2月1日から10日の日程で、地球の木のネパールにおけるパートナー団体SAGUNと 共に、支援地インドラサロワール農村自治体のモニタリング調査を実施しました。今回はネパー ルチームで「ロシラハール」(SAGUNが発行している支援地の機関誌)のネパール語翻訳などを 手伝っているディリップネパールさんと磯野が調査に行きました。

ネパールに新しい旋風

私にとっては一年半ぶりのネパール訪問でしたが、まずは 首都カトマンズの変化が一目瞭然、かつては町中に溢れてい たゴミが消え、渋滞が緩和され排気ガスが減りました。これ は2022年5月の選挙で無所属初当選した33歳のカトマン ズ市長バレン氏の施策が大きな成果を表しているようです。 ごみ収集車による定期回収、違法建築物の取り壊し、歩道を 不法占拠していた露天商の撤去、繁華街の駐車禁止、貧困層 の医療無償化など、斬新な政策を次々と断行。そのスピード 感と実行力に多くの市民、国民が期待を寄せており、ネパー ルに新しい旋風が巻き起こっていることを肌で感じました。

コロナが落ち着き観光客が戻りつつある中、新しいホテル やショッピングモールが次々と建設され、巨大モニター付き の高層ビルが立ち並び、空港は海外に出稼ぎに行くネパール 人で溢れかえっていました。極めつけはスマホのアプリで近 くに待機するタクシーの位置情報を検索し、車内のQRコード で電子決済が可能になっていることに驚愕しました。

インドラサロワールの懐かしい風景

そのような都市化が著しい一方で、地球の木の支援地であ るインドラサロワール農村自治体では、This is Nepal!と言え る懐かしい風景が広がっていました。通常はカトマンズから 車で2時間半ほどの距離ですが、崖崩れにより道路が崩壊し 迂回しながらでこぼこ道を約4時間かけて到着。天空まで届 く段々畑の中を、家畜に食べさせるために刈り取った枝葉を



インドラサロワールの菜の花畑

自分の姿が隠れるほどに大量に担いで歩く女性たち、都会で は誰も見向きもしない外国人を珍しそうに凝視し目が合う と恥ずかしがる子どもたち、昼間は死んだように倒れこんで 眠り夜に遠吠えをする野良犬たち、そして、昼間からどぶろ くを飲み陽気におしゃべりに興じる男たち。昔ながらのこの ゆったりした流れの中で暮らせたら、海外に出稼ぎに行って あくせく働くよりもよほど豊かで幸せだろうと思いました。

SDGsの教育の質の向上を目標に

しかし、教育の視点から聞き取りを進めていくうちに、この 地域における新しい姿が見えてきました。私が最も驚いたの は、この片田舎でSDGsと教育の質の重要性について明瞭に語 る教育コーディネーターに出会えたことです。35歳のクール フェイスなダルマナンドさんは、極西部の出身で自分が高校 生の時から教育行政は社会に大きなインパクトを与えられる と考え、一教師ではなく教育行政官になったそうです。

私が「なぜ教育の質が重要だと思いますか?」と質問をす ると、「この地域では就学率は97%です。でもドロップアウ トガ多く、仕事に結びつかない、生きるために役に立たない 教育では意味がない」「今日の国際社会ではSDGsの中でも教 育の質の向上が目標として定められています。ネパール政府 もSDGsに取り組んでおり、インドラサロワール村もその基準

にそって施策を行っていま す」と答えてくれました。これ までSDGsを掲げるのは先進国 側の経済界ばかりのようなイ メージがありましたが、やは り国際社会全体で採択したこ とであり、地球の木の支援地 においても、同じ目標に向か って取り組んでいることを実 感することができました。



教育コーディネーターの ダルマナンドさん

力を入れる教師トレーニング

調査では3つの中等学校(セカンダリースクール)と2つ の小学校を訪問し、生徒や先生たちと交流しインタビューを しました。ネパールでは公立校と私立校の格差が問題とされ ることが多いですが、インドラサロワール村には私立校があ りません。しかしながら、中等学校(1年生から12年生まで) と小学校(1年生から5年生)だけの学校では同じ公立校で



あっても雲泥の差があることに驚きました。校舎も教材も教 師数も何もかもが、小学校では足りていません。日本人であ る私が行くことで、そうした財政的な支援を期待する声も聞 こえてきました。

地球の木とSAGUNは人材育成にフォーカスしています。今 年度は教師のトレーニングに力を入れてきました。主に、心 理社会カウンセリングの研修と、数学や科学の実践的授業法 の伝授です。大きな中等学校も小さな小学校も同様に、各校 から1、2名の教師を集めて専門家による研修を行っていま す。研修内容は実に参加型です。初めに参加者がそれぞれの 自己紹介を時間をかけて行います。学校を超えた教師同士の 交流が進むことで、共通の課題を認識し、同じ村、同じ地域の 教育レベルを引き上げようという団結力が生まれます。



小学校を訪れた磯野さん(中央)とディリップさん(左)

2月 調査の日程と内容

- 2日 前パートナー団体SOARSのニルマラさんを訪問
- 3日 SAGUN事務所にて調査の準備確認、地球の木ネ パールチームとのオンライン会合
- 4日 インドラサロワール村に移動し、マハチュニ中等 学校にて聞き取り
- 5日 マンジュシュリ小学校の牛徒や教師と交流、カリ デヴィ中等学校にて聞き取り
- 6日 シンハバルワ小学校の生徒や教師と交流、カリカ 中等学校にて聞き取り、SAGUNのハーブ園を見 学、今年度事業の進捗確認と振り返り
- 7日 SAGUNマハンタさんのインタビュー、インドラ サロワール村長、教育コーディネーター、保健コ ーディネーターと面談、試験採点の様子を見学
- 8日 SAGUN理事会への参加と調査のフィードバッ ク、マンガルタール村出身の元奨学生シャルミラ さんのインタビュー、SAGUN理事と夕食交流会
- 9日 元マンガルタール村現地コーディネーターのサ ルバジットさんを訪問

生徒の自主性を活かす授業

心理社会カウンセリング研修を受けた教師は、これまで生 徒の気持ちを考えたり聞いたりしたことはなかったそうで すが、研修後に大きな変化があったと話してくれました。例 えば、いつも宿題をやってこない生徒に対して、以前は頭ご なしに叱っていましたが、研修後はまず生徒の声を聞き家庭 を訪問したところ、親が病気で働けず、代わりに子どもが働 いていたために宿題ができなかったことが分かったのだそ うです。

数学や科学のトレーニングについても画期的であったこ とが、教師たちの興奮して話す姿から伝わってきました。こ れまでの授業では教師が一方的に説明するだけであったの が、生徒が前に出てきて黒板に自分で定規を使って二等辺三 角形を書いたり、紙で三角形を作り、その3つの角を足し合 わせると180度になることを、実際に3つの角を切って並べ ることで確かめるといった授業を見せてくれました。生徒た ちの理解力があがり、成績も急上昇したとのことです。

また、科学のエキシビションが開催されて、マハチュニ中 等学校が優勝したことについては前号の会報でもお伝えし た通りですが、今回は優勝した生徒3名にインタビューを行 いました。地元で入手できる材料を使って、インドラサロワ ール湖にある水力発電ダムからヒントを得た水力発電機の ミニチュアモデルを作った生徒、地震が来た時に知らせる警 報機を作った生徒が、自分の作品を見せながら説明してくれ

ました。日本では当たり前 のように行われているエ 作や実践的な授業は、ネパ ールでは、以前は教師が教 科書を読むだけであった 授業を画期的に変え、教師 も生徒も実に生き生きと した表情をしていました。



三角形の内角の和を調べてみよう

今回のモニタリング調査を通して、「質の高い教育」が教師 たちの考え方と授業を変え、生徒たちの意識を変え、教師と 生徒たちの関係性を変え、未来に希望をもたらすことを実感 できました。インドラサロワール村の行政官、教師、生徒、村 人たちから地球の木の皆様に、たくさんの「ナマステ(こんに ちは)]と「ダンネバード(ありがとう)」を預かって参りまし たので、この場をもってお伝えさせていただきます。



地球の木へのプレゼントの絵を描いてくれた子どもたち

(ネパールチーム 磯野 昌子)

あーすフェスタかながわ2023

神奈川県民約923万人の内、現在約2.6%(約24万人)が外国籍県民として暮らしています。 多様な国籍、文化を持つ多くの県民が集い、互いの価値観、文化を尊重し合う 「多文化共生」の実現に向けて2000年にスタートした「あーすフェスタかながわ」が今年度も開催されました。

体験しよう、考えよう

好天に恵まれた昨年12月3日、象の鼻パークのステージで は、様々な国の歌や踊りが上演され、各テントでは中国の切り 絵や、世界の楽器体験、衣装体験など楽しいワークショップが 行われました。県庁で行われた午後のフォーラムでは、ペル ー、中国、カンボジアから日本に来て多文化共生の活動に関わ っている若いリーダー達が、次の世代にどのように運動を引 き継いでいくかを話し合いました。

言葉を学んでみよう

私が企画委員としてあーすフェスタに参加した今回は、各 国の言葉と文字、特にネパール語と韓国・朝鮮語を紹介する企 画を行いたいと考えました。この二言語を選んだのは、地球の 木が長年ネパールと関わり、現在かながわネパール人コミュ ニティとつながりができている事と、これまでの「多文化共生 の地域づくり」の活動を通じて、在日コリアンへの偏見・差別 が根深く残っていると感じたためです。

「ネパール語の挨拶を覚えよう」のワークショップは、理事 のサプコタさんと留学生のナエンさんという2人のネパール 人の協力のおかげでとても盛り上がりました。ブースを訪れ た人々は、今度ネパール人と会ったら、ネパール語で挨拶でき るように、と挨拶や自己紹介の仕方などを練習したり、ネパー ルクイズに頭をひねったり、とても楽しそうでした。皆さん、



デバナガリ文字で名前が書けた!お手伝いするナエンさん

ネパールで使われるデバナガリ文字で苦労して書いた自分の 名前を写真に収めていました。

午後の「韓国・朝鮮語の挨拶と言葉」のブースには、幼稚園く らいの女の子を連れた家族が訪れました。女の子は、自分の名 前を先ずひらがなで書いて、その下にハングルで名前を書く ことができました。「多文化読み聞かせ隊」の孔敏淑(こんみ んすく) さんが 「朝でも昼でも夜でも、アンニョンハセヨとい う挨拶でいいのよ。言ってみて」。すると女の子がきれいな発 音で「アンニョンハセヨ」と言ったので、お父さんが驚いてい ました。敏淑さんからも「上手に言えたね」と褒められ、今日の 体験は、ささやかながらも彼女の心の中に残った事でしょう。

以中人者也并且不可以以以被可以不可以者也是是更多可能以接口我,不由人者也是更多回答以前,不由人者也是更多回答以前

多文化共生の地域づくりの今後の活動について

「かながわネパール人コミュニティとのつながりを作っていく」「神奈川県内の朝鮮学校が開催する イベントや学習会に参加し、授業料の無償化除外の解決に向けての取り組みにも関わっていく」ことを目指します。

ネパール語教育をサポート

かながわネパール人コミュニティは、中区寿町で年に1回 定例の炊き出しを行い、また1月の能登半島地震の際にもカ レーの材料と簡易洋式トイレを持って駆け付けています。地 球の木は、彼らの課題となっていた子どもたちの母語教育の 実現をサポートしたいと考えています。

在日コリアンの事一知ってほしい、聴いてほしい

昨年6月11日(日)に訪れた神奈川朝鮮中高級学校の「文化 交流祭」では、各教室で生徒たちが主体となって企画した、伝 統的な遊び(独楽や矢投げ)や、伝統的法事である「祭祀ちえ さ」が紹介され、楽しみながら文化を学ぶ工夫が凝らされてい ました。

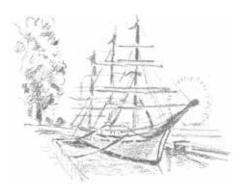
一方、県の補助金がなくなったこともあり、運営は厳しいも のがあります。現在、校舎の老朽化に対し、自前で寄付を集め て耐震改修工事が進められています。またトイレを新しくし たいとクラウドファンディングを行いました。

在日コリアンの人々が大事にしている生活文化を、多くの 日本人に知ってもらい、偏見を取り除く活動を進めたいと思 っています。その中には、今の北朝鮮の独裁政権と、その支配 下に暮らす2,000万人もの人々の生命や人権とを明確に分け て考えるということも含まれます。地球の木がこれまで関わ ってきた「南北コリアと日本のともだち展」を通じて、企画に 参加してきた若者たちの声を聴く学習会を開催できないか検 討しているところです。

(多文化共生の地域づくりチーム 山田 孝志)



SDGs多文化CITYフォーラムよこはま 2/17



地域で活動するNGO/NPOなどが、国際協力に関わる講座や報告会、ワーク ショップなどを行うこのイベントは、2020年までは「よこはま国際フォーラ ム」としてJICA横浜で開催されてきました。数年のオンライン開催を経て、今 年度は「SDGs多文化CITYフォーラムよこはま」という名前でのリアル開催と なりました。場所も桜木町の日本丸メモリアルパーク訓練センター。コンパ クトながら、横浜の観光名所、帆船日本丸のそばの会場は新鮮でした。

地球の木は、現在行っている活動を、今回はSDGsの目標と照らし合わせ簡 潔にまとめて報告しました。目標4「質の高い教育をみんなに」では、ネパール のインドラサロワール農村自治体の学校で進んでいる、教育に特化したプロ グラムについて。また、ラオスの子どもたちにもっと本を、と願って行ってい

る「ラオス図書プログラム」についてもここで報告しました。

JVCを通して支援している、ラオスの農民たちの暮らしや共有資源を守る プログラムは、目標15「陸の豊かさも守ろう」に沿う活動であり、セコン県で の現況について報告しました。また、ラオスから学んだことを日本に住む自 分たちの暮らしとつなげて考えようという国内活動を、目標12「つくる責任 つかう責任」として話しました。

多文化共生の地域づくりの活動は目標16「平和と公正をすべての人に」と し、川崎でのフィールドワーク、対話カフェについて報告しました。

参加者は10数名でしたが、最初に出されたネパール、ラオス、南北コリアのクイズでは会場が引き込まれたような空気 (会報作成チーム 斎藤 和子) になり、よかったです。時間切れで話し合いができなかったのが残念でした。



インターンの大学生が学び、考えたこと

4か月近く、80時間を地球の木でインターンとして過ごした井上綾香さん。どんな場所 でもどんなことでも一生懸命に向き合う姿が印象的でした。井上さんの感想です。

今回の実習ではたくさんの新しい経験をさせていただきました。クラフトの販売で は生活クラブデポーにお邪魔して、生協についてのお話を聞きました。その中では、お 肉の無駄のない分配がされていたというお話が印象に残っており、自分の食に対する 行動を見つめ直すきっかけになりました。そして、私が地球の木の中で最も興味があ った国、ラオスに関する活動にもたくさん参加させていただきました。地球上にはさ まざまな問題があり、それらは全て私たちの生活と繋がっていること、ラオスの今と 昔の生活様式の変化、現代社会で抱える問題などを知り、それらを持続的に解決して いく支援をするためには歴史や文化を理解することが重要であることを学ぶことが できました。また、クラフトのチラシ作りをさせていただいて、外に向けて情報を発信 する際の言葉一つ一つに注意を払い、支援者に対する理解を深めながら文を作ってい くことができました。世界の問題や自分の生活に目を向けるから目の前の作業におけ る注意点まで、幅広く学び、考えることができたと感じています。

世界中に存在する多種多様で魅力的な文化や自然、生き物たちが守られていくため に地球の一市民として私には何ができるかを考えていきたいです。短い間でしたが大 変お世話になりました。ありがとうございました。 (桜美林大学2年 井上 綾香)



井上さんにはストールの モデルもしていただきました

第25回 地球の木 総会のお知らせ

□時 5月25日(土) 13:30~16:00

□会場 オルタナティブ生活館2F「オルタリアン」(新横浜駅から徒歩7分)

*詳細は別紙の「第25回地球の木総会のお知らせ」もしくは団体ホームページをご覧ください。

トルコ・シリア地震緊急支援報告

昨年2月のトルコ・シリア大地震から1年。(特非)パルシックから、地球の木が皆さまにご協力いただいた 募金などで行った支援をまとめた報告が届きました。報告書は地球の木のホームページに掲載しています。 なお、パルシックの支援活動は継続しています。今後のトルコ・シリア大地震に関する情報をお知りになり たい方は、パルシックのホームページをご覧ください。

幸世分かち合い年末募金

\ ご協力いただき ありがとうございました! /

今年も会員の皆さまをはじめ、 100名の方からご協力をいただきました。 皆さまのあたたかいお気持ちに心より御礼申し上げます。

◆年末募金総額…844,200円

〈寄付先別内訳〉

- ◆ネパール…197,800円 ◆ラオス図書…68,900円
- ◆ラオス…109,500円 ◆指定なし…468,000円

2023年にいただいたご寄付の領収書を2024年1月30日に 発送いたしました

ホームページ リニューアルのお知らせ

2024年4月から、地球の木ホームページがリニューアルさ れます。スマートフォンやタブレットでもより見やすく、動画 などのコンテンツも充実した内容になります。これに伴い、ホ ←ムページのアドレスやメールアドレスも変更されます。新し いアドレスは追ってご案内いたします。

活動日誌(12月~3月抜粋)

■12日

3日 あーすフェスタかながわ2023

10日 安井清子さんお話会

~本とラオスの子どもたち~

11日 デポー展示会(つなしま)

14日 ラオス図書貼付ボランティア

16日 第7回定例理事会

■1月

12日 ラオス図書貼付ボランティア

13日 第8回定例理事会

15日 デポー展示会(たかつ)

18日 ラオス図書貼付ボランティア @明治学院大学

30日 ラオス図書貼付ボランティア

■2月

1~10日 ネパール現地訪問

17日 SDGs多文化CITYよこはまフォーラム

23日 地球の木学習会 森に学ぶ

~新治市民の森を歩く~

23日 第9回定例理事会

■3月

9日 第1回臨時理事会

14日 ラオス図書貼付ボランティア



◆またも能登で大きな地震が起きた。悲惨な状況を伝えるニュースの中で、「キャッシュ・フォー・ ワーク」に従事しているという、少し表情の明るい現地女性が映った。「キャッシュ・フォー・ワー ク」とは災害で仕事を失った被災者自身が被災地の復旧事業に貢献し、対価として収入を得る仕 組みだ。地球の木は、東日本大震災の時に寄せられた多くの寄付金をこの手法に活用した。「何も しないでいると色々考えて不安になるので、仕事があって嬉しい」

と彼女は話す。災害時には先ず物品支援をと考えるが、ただ与えられるだけでは満た されないのが人間というものだ、それを再認識したニュースだった。 (M.H)

